

# 地域の教材化の視点

黒坂 裕之

(教育学部)

## Point of View to Choose the Teaching Materials Regarding Regional Studies

Hiroyuki Kurosaka

Faculty of Education

### 要 旨

社会科教育において、地域を教材化していくときの観点を指導要領の目標の記述から探る。さらに、文献情報や現地での調査によって確認した鹿児島市と北海道の住居構造に見られる共通点を素材に考察する。「人間と自然との関わり」を追求する社会科地理の立場でこの共通性をどう見るかを考える。素材から理解にいたる考察の進め方を著者自身の体験から具体的に記載する。

#### 1. はじめに

社会科において、「地域の教材化」ということがいわれるが、それはどのようなことであろうか。

学校の所在地(市町村・都道府県)の社会的事象を学習の素材とするということだけではないであろう。日本全体の学習においても、地域という視点なしには社会科の学習にならないように思われる。

菅原康子はその著書「地域を教える—小学生が本音で語るとき—」の中で「重要なことは、事実を事実としてとらえること。そのような契機に会った時子どもの見方、考え方が客観性を持ち、自己中心的な見方から抜け出すことができる」と指摘する。

「事実を事実としてとらえること」のためには、さまざまな事象の起こっている現実社会の中から、何を事実として切り取るのか。どのような事実を提示すると子どもの契機と

なるのか。子どもの契機となる事実とはなにか。それには、教育課程や子どもについての理解だけではなく、具体的地域や社会について、広い関心と深い理解が必要となる。

現実社会の中から事実を発見するには、情報を集め、処理する能力が高くないといけない。ここでいう情報とはなにも数値化され、コンピュータ化されているものだけではない。

一般に、データとは、立論・計算の基礎となる既知のあるいは認容された事実・数値、資料のことである。資料とは、もとなる材料のことで、特に、研究・判断などの基礎とする材料のことをさしている。

そして、情報とは、これらのデータや資料をもとにした、判断を下したり行動を起したりするために必要な知識である。

すなわち、単なる知識は、情報ではないことになる。

言葉を変えれば、情報処理とは知識を「知恵」とすることである。「知恵」と言う言葉の中には行動原理まで含まれてくる。

本論では、地域からの情報の収集と処理の具体例を述べることにする。

## 2. 社会科教育における地域

### 2. 1. 小学校社会科の目標にてらして

小学校学習指導要領社会の目標では、地域に関して次のように記載している。

第3学年の目標は、次の3点である。

第1は、「地域社会の成員としての自覚を育てる」ことであり、第2に、自然環境と結びついている地域の生活を通して、「地域によって消費生活や生産活動に特色があること」などを理解できるようにし、「地域社会を大切にすることを育てる」ことである。第3に、具体的な観察と具体的資料の効果的活用による、「地域社会の社会的事象の特色を考える」方法・手段の獲得である。

第4学年の目標は次の3点である。

第1は、身近な地域の開発のようすを知ることから、「地域社会の成員として地域社会の発展を願う態度を育てる」ことである。第2は、自然環境の理解と、「特色ある地域における人々の生活の様子」についての理解を通じて、「広い視野から地域社会の生活を考える態度を育てる」ことである。第3は、「社会的事象の特色や相互の関連」などについて考える方法・手段の獲得である。

第5学年の目標では、第3に、「基礎的資料を効果的に活用」することが求められている。

いずれも、第1はその学年の社会科でめざす「態度」であり、第2は、その養成のための資料的内容であり、第3は資料的内容を情報にすべき手段・方法の獲得、すなわち情報処理に関することであると、解釈できる。

3つが総合されて、はじめて目標は達成される。すなわち、資料の中から地域の具体的事実を抽出し、比較検討することを通して情報化する。その結果、望ましい「態度」の養

成が可能となる。

### 2. 2. 社会科教育における地域

地域とは算数・数学でいえば、例題に相当する。

どのような例題が適切かといえば、低学年においては、身近な生活空間の中から探しますが、適切である。だから、自分の住んでいる地域社会の事象からはじめるのである。地域社会の事象なら何でもよいわけではないのは当然である。

地域の様々の事柄についての結果を覚えるのではなく、どのようにするとそのような事柄が見えるかという見方・解き方を学ぶ。情報処理の方法を身近な地域を例に学んでいくことになる。

第3学年・第4学年の内容にある「広く国内の他地域などとかかわりがある」ことや「国内の他地域や外国ともかわりがある」ことに気づかせるためには、どのような事象を取り上げると理解しやすいかは地域の実情によって異なるはずである。

さらに、「自然条件からみて国内の特色ある地域」を取り上げるとなると、自分の住む地域の理解なくしては、他地域の特色の理解は困難であろう。

自分の住む地域との比較によって、共通点が理解され、その上にたつて、はじめて相違点の理解が可能となる。比較の基準は必要である。

第5学年の内容の取扱いでは、「農業の盛んな地域の具体的事例は、稲作のほか、野菜、果実、畜産物などの生産の中から一つを取り上げる」としている。さらに、「工業の盛んな地域の具体的事例は、金属工業、機械工業、化学工業などの中から一つを取り上げる」のである。

これは、取り上げるものは「具体的事例」であり、その選択が適切になされるように求めているのである。何を取り上げてても教材と

なるという意味ではない。

社会科の目標と地域の実情そして、子どもの実態に即して、どの地域の何を取り上げることで、子どもの中で知識を情報化できるかを教師が考えるように求めていると、解釈できる。

そういう意味で、地域は例題であるといえる。どのような社会的な見方・考え方を育てるのか、それがはっきりしていないと、例題としての地域は選択できないはずである。

### 3. 鹿児島と北海道の住居の類似点を例に

筆者の社会科教材の開発について述べる。この素材は、教育学部の地理学Ⅱ（現・自然地理学）や免許法認定講習会の社会科概説の講義の中でも紹介した。

原文は黒坂発行の個人誌「地・知」1989年6月号に掲載したものである。若干の手直しの上、報告する。

#### 3. 1. 課題の発生

倉嶋厚の本を読んでいて、「北海道の住宅には、雨樋はついていない」という記述に出会った。この場合の北海道は倉嶋の任地の札幌をさしていると思われる。そして、「例えば、鹿児島にもなかった。」と続いていた。鹿児島も倉嶋の任地の1つである。

個々の地域では気づかなかつたことが、地域を比較する機会があり、事実としてうきあがってきて、意識されたということであろう。

私も雨樋なんて意識したことはなかった。現住地は茨城県であるが、前の家を見ると、確かに付いているのである。私の育った北海道の函館の家には、付いていたであろうか。どうも、なかったように思う。

1988年の夏に鹿児島市へ出張する機会があった。その折に、家の造りなどを注意して見ることができた。確かに、鹿児島市の家にも、雨樋は少なかった。

そして、もう一つ、気づいたことがある。鹿児島市にも、北海道にも陸屋根（水平な屋根）が少ないのである。鹿児島市では、ご案内くださった方によると「建て直すときに陸屋根から、傾斜のある屋根にしている」という。どうも、知らずに陸屋根にしてしまう地域外の人がいるらしい。

日常見慣れているはずのものも、改めて指摘されて、初めて気づくということもある。見ている、実は見えてはいなかった、ということである。見えていないものは、「雑談」のネタにも、まして教材にはならない。存在しないのと同じであるのだから。

小学校3年生では「自分たちの市町村と比べて自然条件が異なる地域」を県内から選び、その地域における生活のようすを理解させる学習がある。それは、自分たちの地域の特徴をより鮮明にとらえる目的から学ぶものである。

違いに気づくということは、共通点の理解が前提にある。日常生活を構成している様々なものの様子が意識化されている必要がある。毎日のことのように繰り返されている生活が、意識的になされている必要がある。生活全部を意識に登らせるのは困難であるし、もして、全てを意識できたとしたら、逆に生活自体ができなくなる。無意識にやっているから歩けるのである。

日本の中の生活は均質化されてきたとはいえ、まだまだ地方色豊かである。しかし、それに気がつくのは、自分の土地のことが理解できている人である。自分の土地との比較でしか違いが分からないのだから。

当たり前だと思っていることも、今一度「あたり前」のことかどうか確認しておくという作業は必要であろう。海外に出ると、日本が、自分の持っている日本像が分かるというのは、日本との比較が否応なくされるからである。

「鹿児島市や北海道（札幌）では雨樋のつ

いている住宅は少ない。また、鹿児島市にも、北海道にも陸屋根（水平な屋根）が少ない」という事実から、次の問題が出てくる。

「鹿児島市と北海道において、住宅の構造に共通点があるのはなぜか。」

### 3. 2. 鹿児島市での検討

「雨樋の少ないところ」は「どこか」という問いには「鹿児島市、北海道」と答えることはできる。

次に、そこは「どういうところか」という問いに答えよ、ということである。

では、鹿児島市・北海道はどのようなところか。現象（住宅の外観）が共通だからといって、原因も共通という保証はない。個別に考えて、後で、共通点を考えてみよう。

鹿児島市から考える。鹿児島県ではなくて鹿児島市であるのがヒントになる。

鹿児島ときいてまず、何が思い浮かぶであろうか。

桜島—噴火とくれば、火山灰である。

鹿児島で聞いた話によると、舞い落ちた火山灰が、雨樋につまり、雨樋が腐ってしまうのだそうだ。また、陸屋根だと、火山灰がいつまでも屋根に積もっており、細かいので風ですぐ舞い上がるのだという。

夏・冬で風向きが違うので、降灰地も違う。爆発音がしたら、まず、風向きを見る。暫くして、灰が落ちて来る。噴石があると、車のフロントガラスがこわれるので、いつも、ボロ毛布を持参している。

灰は細かく、よく舞い上がるので、窓は閉め切って、クーラー生活だ。降った後の除去処理もたいへんだ、というのだ。

克灰住宅では居室の前にサンルームを造るという2重構造にして、灰を室内に入れないようにしている。

家の屋根に水道管を回し、降灰があったら、水で除去（流し落とす）する工夫をした家も見かけた。

同行の指宿の人は、「桜島の人は慣れてるかしらんが、私は住みたくはない」という。鹿児島といっても広いのである。

鹿児島市は「桜島の降灰」が雨樋の少ない原因といえそうである。

### 3. 3. 北海道での検討

では、北海道は？。北海道全域を単一には考えられないので、札幌周辺で考えてみよう。

灰と同じように積もって害をなすものが関係しているのでは、との推測はできよう。

雪が多いからでは、ということはすぐに思いつく。

しかし、札幌より多雪の金沢には雨樋がある。もっとも、冬にはよく痛むので、毎年のように修理が必要になるのだそうだ。

すると、雪だけが原因ではなさそうな気がしてくる。

札幌と金沢の違いは何か。それは気温にある（表1参照）。

冬に低温となることと関係がありそうである。北海道の外の気温は低いが、住宅の中は非常に暖房をきかしている。北海道人は寒がりであり、冬の室内は本州の人には暑いくらいである。

余談だが、昔の私の実家では、冬には台所のビン類はよく凍ってしまった。毛布とかをまいておいても、凍らせることがあった。水道があっても、水瓶に水が用意されていた。その水で水道管凍結の際には、水道管内の水を融かすためのお湯を沸かす。

冷蔵庫を買ってからは冷蔵庫の中に入れておくことで、ビン類の凍結は防げるようになった。冷蔵庫の中は+3℃に保たれているのである。冷蔵庫の中の方が暖かいことであるのだ。

話は戻るが、暖房をきかすと、熱が屋根に伝わり、屋根に接する雪が融ける。夜は零下になるので、融けた水は凍結して、つららができる。

雨樋があると、その中で氷結してしまい、ふさがることになる。さらに、水は凍結する時の膨張するので、雨樋が壊れてしまう。

とはいっても、金沢であっても零下になることはあるのだから、これだけでもないような気がする。

そこで、雨樋を必要とする条件を考えてみる。

当たり前だが、雨樋は屋根に降った雨を効率良く、じゃまにならないように流し去るためにある。いつまでも屋根が濡れていることは、屋根材にとって好ましいことではない。雨漏り発生の原因ともなる。

北海道（札幌）では、夏の雨は本州に比べて、格段に少ないのである。つまり、雨樋が本来の役目を演じる機会が少ないことになる。

札幌の場合は、冬の積雪・低温と夏の寡雨が関係していると考えられる。

以上は、私なりの解答である。正しいかどうかは、もう少し調査が必要である。

### 3. 4. この章のまとめ

なぜ、このような話を社会科概説のなかでしているのか。社会科、そして地理学とはどのようなものであるのか、あると考えているのか、ということと無関係ではない。

つまり、教員養成という教育課程の中での自分の講義の位置付けを考えると、何を講義すべきかが出てくるからである。

それは、鹿児島や北海道という地域を例に、身近な見ようと思えば見ることのできる雨樋というものを例として、自然と人間との関わりという地理学の課題について見る目を持ってほしいからである。

雨樋は例題である。鹿児島や北海道も例題である。

雨樋、陸屋根以外に、鹿児島市と北海道の住宅、とくに集合住宅には気づいただけで5点ほど共通点がある。それを例題にすることも考えられるが、すぐ目につくものでもない。

講義では最後に紹介するだけである。

問題設定の仕方こそがこの講義で伝えたいことである。私の教えるべきこと、と考えている。

その際に、借物の問題では教育に迫力が、実感が出てこないだけである。

最後に、鹿児島の人々の感想を紹介しておこう。

「雪は半年で消えてなくなるが、降灰は年中、それもいつあるかきまっていけないだけに、やなもんだ」。

### 4. おわりに

社会科は、地域の事象そのものについて理解し、記憶することを目標とはしていないと考えられる。学習指導要領の目標にもあるように、社会的事象に関する情報処理の習得を通して、「地域社会の構成員としての望ましい態度」を養成することが求められている。

「態度」は知識を情報化することでしかできてこない。別の言葉でいえば、知識を「知恵」としていくことである。

知識を情報化していく1つの方法は、身近な地域の具体的観察と、他地域との比較である。身近な地域の理解の仕方によって、比較すべき地域が異なってくる。

分かりやすさが異なってくるからである。

社会科として、地理学として、どのような「態度」を育てるのか。そのような問題設定において、どのような地域のどのような事象を取り上げると、知識が「情報」化、「知恵」化していくのであろうか。

その意味で、取り上げる地域は例題の1つであるといえる。応用問題は各自が創り、解いていくものである。

地理学は自然と人間との相互関係の理解である、という立場での例題として、「鹿児島と北海道には雨樋がない」を示した。鹿児島も北海道も、そして雨樋も事例である。情報収

集の過程を生に近い形でここに示した。

このような例題の良否を一義的に決める客観的基準を今のところ持ち合せていない。唯一基準らしきものは「楽しんでもらえたか」「面白がってもらえたか」である。

人間、どうも面白いことは他人に話したくなるようである。私自身は「のって話している」。面白いと思った方もおられたようで、話が少し外に広がっているようである。

そのような経験から書き残す価値があると思ったことが、本論を書く動機の1つである。

大学の地理学研究者の役目の1つに、どのような問題設定ならどのような地域のどんな事象があるか、を具体的な形として提供していくことがあると思う。

それは地理学研究、地理学的思考を深めていくことでもなる。このことが本論を書く第2の動機である。

提供された素材を利用するしない、できる

できないは、利用しようとする側の理解水準の問題も係わってくる。それはどのような学生を送り出したかという大学教育の問題でもあり、教員の自己研修のあり方の問題であろう。これに関しては述べない。

3章のほとんどが、聞き取りや観察から得たものである。特に文献を上げることはしなかった。

〔付 記〕

鹿児島市をご案内いただいた、当時の文教大学父母と教職員の会鹿児島支部の役員の方々に感謝申し上げたい。文教大学父母の教職員の会の20周年の年に、このような記録を残せることはうれしいことである。

最後に、教科教育の門外漢である著者にこのような発表の場を提供して下さった仙崎教育研究所所長に感謝申し上げます。

表1 月平均最低気温と月降水量（鹿児島、東京、金沢、札幌）

月	鹿児島		東京		金 沢		札 幌	
	Tmin	P	Tmin	P	Tmin	P	Tmin	P
1	2.4	95	0.5	54	0.2	308	-8.9	114
2	3.4	106	1.2	63	0.1	199	-8.5	92
3	6.1	147	4.2	102	2.1	166	-4.3	78
4	11.4	256	9.8	128	7.2	157	1.7	65
5	15.5	275	14.5	148	12.1	146	7.1	59
6	19.6	475	18.4	181	16.9	203	11.6	76
7	23.9	323	22.2	125	21.5	256	16.4	80
8	24.1	209	23.6	137	22.4	196	17.6	31
9	21.0	211	19.9	193	18.4	250	12.4	142
10	14.8	108	13.9	181	12.4	200	5.7	115
11	9.3	92	8.4	93	7.1	235	0.1	104
12	4.2	80	3.3	56	2.9	329	-5.3	101
	2,377		1,461		2,645		1,157	

(注) Tmin : 日最低気温の月平均値 (°C). P : 月降水量 (mm)  
1951 - 1980年の平均値。理科年表による。